

コロナ禍で見えてきた日本の性教育

早稲田大学政治経済学部3年

伊東瑞紀・小野葉月・塩塚梨子

導入部

2020年3月、新型コロナウイルス感染症対策のため、全国的な休校があった。そんな中、未成年の予期せぬ妊娠の相談件数が増加したことが各メディアで報道された。性暴力被害や予期せぬ妊娠、人工妊娠中絶の増加が懸念され、女性のリプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）の悪化が予想された。しかし、厚生労働省研究班によると、日本では2020年5月から9月に人工妊娠中絶件数は減少し、妊娠件数も減少したことから、「予期せぬ妊娠等による中絶が増加したとは言い難い」結果となった。

「予期せぬ妊娠」はコロナ禍において増加しなかったが、未だ解決されていない問題である。また、リプロダクティブ・ヘルスを考える上で重要な課題であることから、私たちはその原因を探究することにした。

まず、「未成年の予期せぬ妊娠」は普段から性教育が十分になされていないことに起因すると、私たちは考える。実際、日本の保健体育の授業では避妊の具体的な方法はほとんど教えない。文部科学省が定める学習指導要領には、中学校の保健体育では「受精・妊娠を取り扱うものとし、妊娠の経過は取り扱わないものとする」と明記されているのだ。高校の保健体育の授業ではじめて避妊法としてコンドームとピルが登場するが、その具体的な使用方法や注意点などは扱っていないのが実態である。

そこで、日本の性教育の遅れが改善しない要因を探るべく、保健体育科専任教諭の大森由季子さんと性教育学生団体Palette代表の宮坂舞花さんに取材を行った。

現場から見た性教育の現状

大森 由季子（おおもり ゆきこ）

東京都私立国際基督教大学高等学校保健体育科専任教諭



1979年4月15日生まれ。1998年、筑波大学体育専門学群に入学。2年次に同大学第二学群人間学類教育学専攻へ転学類し、卒業。2005年、筑波大学大学院体育研究科健康教育学専攻を修了し、同年に東京都私立国際基督教大学高等学校の保健体育科専任教諭に赴任。保健体育科専任教諭として授業及び公務分掌を担う他、男子バスケットボール部のクラブ指導を行う。「学ぶ喜び」を生み出し生徒の成長を間近で感じながら、自分自身が学び続けられることに先生としてのやりがいを感じる。趣味は、語学、読書、海外ドラマ鑑賞。

一 学習指導要領の役割

小野 保健の授業には指定された学習指導要領があるんですか。

大森 あるよ、学習指導要領。よく見たら、性教育に関して全然大したこと書いてなかった。「思春期と健康、結婚生活と健康及び加齢と健康を取り扱うものとする。また、生殖に関する機能については、必要に応じ関連付けて扱う程度とする。責任感を涵養することや異性を尊重する態度が必要であること、及び性に関する情報等への適切な対処についても扱うよう配慮するものとする。」

小野 性教育が日本の学校でしっかり行われていないという現状の問題は、説明不足な学習指導要領に起因していると思いますか。

大森 あまり学習指導要領にすごく沿ってやっているわけじゃないから、これにすごく問題があるとは思わない。それよりも、この扱い方とか、どう噛み砕くかっていうことへの理解の方が重要だと思う。結局、これをすごく詳しくすればするほど、今度はこれに書いてあることしか教えないようになってしまうから。やっぱり授業って生き物ってというか、生モノだから、それをどう生徒に合わせて教えていけるかっていうのが教員の一番の仕事かなって私は思います。だってICU高校で教えるのと、すごく問題をたくさん抱えている高校で教えるのとでは、全然違うわけじゃない。あとは、保健って家庭の事情とか色んな要素が関わっているからこそ、その学校に合わせて適切に教えられるっていうのはすごく大事なんじゃないかなって思います。

小野 私はてっきり学習指導要領に問題があって、要領がしっかりしていないから性教育が疎かになっているんだと思っていました。でも、必ずしもそうとは限らないんですね。

伊東 さっき「授業は生モノ」とおっしゃっていましたが、先生が自分の担当の生徒の状態を見られるっていうメリットはありますよね。

大森 あると思う。だから詳しく書けないんだと思うよ。学習指導要領に書きちゃうと、人権問題になってしまう可能性があるよね。例えば、性行為は何歳までしちゃいけませんとか。全部書いてくれてそれを読めば伝わるんだったら一番楽だけど、なかなかそうはいかないよね。特に性教育は難しいんじゃないかな。

一 ICU高校での性教育

小野 ICU高校では、どのような性教育をしていますか。

大森 私が担当していたときは、学年分のコンドームを買って、キットを使って学ばせてた。あとは、避妊具見本セットっていうのがあって、それを実際に使ってた。

—避妊具キット見せてくれる—



小野 キットを使っていたのはいつの話ですか。

大森 2005年くらいから2~3年かな。あれ以来やっていないと思う。担当が変わっていくところやって使われなくなっていくんだよね。絶対使わなきゃいけないみたいな強制力は、この学校では少なくともないので。

塩塚 そのキットは支給されるわけではなく、先生方が購入されるんですか。

大森 うん、そうだね。

塩塚 そうなるとやはり先生方の裁量が大きいということですよ。

大森 そうだね。特に私立は結構教員の裁量じゃないかな。予算の問題もあるので、DVDとか、体育課に与えられる予算の中で買えるものは限られているかな。うちでは、生徒への負担に差がないほうがいいという考えで、あるクラスでは一切テストしない、あるクラスではめちゃくちゃテストするみたいなことがないようにしてるのね。授業ってまず評価から決めないといけないじゃない。だから評価できるもので授業しているかな。

一 教育における「評価」という壁

塩塚 先に評価を決めて授業を決めるっておっしゃったと思うんですけど、やっぱり保健で包括的な、実践的なことが中々教えられないのは評価ができないからというところも関わっているんですか。

大森 そう思うよ。非常に価値観が関わることだし。学校にも寄るんだけど、授業ってまず評価から決めるのね。例えば、性のことでトランスジェンダーの話をしたい先生がいても、他のクラスでやっていなかったら、テストに出せなくなる。でもそれは、クラスごとで試験範囲にあまり差がないようにしているから。多くの学校は大体横並びで、保健なんかは共通テストの学校も多いから、そうすると教科書からあまり離れられないよね。深いこととかやっても結局テストに出せないし、評価できないから。

塩塚 答えがないから。

大森 そうそう。だからこそ包括的性教育はすごく難しい。だって考え方をマルバツされるのって微妙じゃん。でも、例えば性の部分だったら、排卵期とか、ちゃんと知識として知っていることは大事じゃない。喫煙だと、代表的なものとしてタールやニコチンなどがあって、ニコチンはこんな作用があって、こんな病気になる危険性があるんですよっていう知識。だから知識を問うことが評価になる。

一 日本の保健科教諭のあり方

小野 評価のシステム以外で現状に問題があると感じることはありますか。

大森 体育科特有かもしれないけど、体育の中に保健があるじゃない。だからやりたくなかったり苦手だったり、あまり重要視していない人が正直多いと思う。保健科教育という分野は割とマイナーな人たち。だって体育教えたいんだもん。部活見たいんだもん。でも授業しなきゃいけないし、テスト作んなきゃいけないし。歳をとってから保健の授業はすごく重要で楽しいって思うようになるっていう人はいる。だけど最初から体育の先生で保健の授業頑張りますみたいな人はあんまりいないと思う。そこもやっぱり問題かな。学校健康教育を考えると、保健体育科教諭の重みがわかる。だって扱う範囲がものすごく広いじゃない。それに内容もどんどん変わるでしょ。喫煙とか飲酒とか、コロナで飲み歩いている人なんていないときが1年以上あったから、高校生が電車のホームで酔っ払っている人なんて見てないわけじゃん。授業、

変わるよね、そうすると。普通は、喫煙についての授業の出だしで、「いるいる、昨日もおじさんが吐いてました」とか言って、「どうなっちゃんだろうね」とかって話を始めたりできるけど、お酒を飲んでいる大人がいない1年半だったから。社会が常に変わるから授業研究していくのは大変だになっていえるのは思う。それを体育の先生がやるわけだから。どうでした、皆さんの学校の体育の先生は。

伊東 やっぱりおっしゃるように、体育がメインで保健、特に性教育なんかはちょっと触れて、すぐに次の単元に移っていくっていう感じでしたね。

大森 多分触れられないのか、深めていいかわかんないのかもね。

伊東 その時の先生が男性で、女子校だったんですよ。だからもしかすると配慮っていうか、本来はしてくれてもよかったんですけど、そういう葛藤みたいなのがあったのかなって思いました。

大森 男性が多いっていうのもある。うちもそれちょっと課題ではあるんだけどね。色々難しいんですよ。やっぱり得意じゃない人、色んな人がいるから。やっぱりある程度丁寧にやらなきゃいけないなって。

塩塚 うちが公立校だったんですけど、ほとんど男性の先生で、私も性教育は男性の先生に学んで、さらっと流された感じで終わりました。あとやっぱりおっしゃっていたように、部活をやりたっていう先生が体育教師になられていたので、基本保健体育を学んだっていうよりも体育、スポーツを学んだっていうイメージしか私の中では残ってないですね。

大森 それが多分マジョリティーかなって思う。そう考えるとICU高校は結構保健を丁寧にやっていると思う。

ー コロナ禍で変わったこと

小野 コロナ禍で未成年の予期せぬ妊娠の増加が懸念されていましたが、学校の性教育で変わったことはありますか。

大森 あまりないんじゃないかな。コロナだからこういう授業をしましょうっていうのはないかな。体育の方が、授業ができないからこうしましょうっていうのはあった。体育は感染の不安もあるし。でも保健の授業は今まで通りできるから。

小野 そうなんですね。では、普段、性教育をする際に気を付けていることはありますか。

大森 生徒それぞれいろいろなことがあるから、言葉には気を付けている。でも、オブラートに包みすぎると何も言えなくなるよね。ある程度自分の偏見って構築されているわけじゃん。それを完全には払しょくできないし。そういうところには気をつかう。学校教育も今は結構ビビってると思うから。性教育とか特に。だから地域とか家族とか、もう少しそのレベルでの教育があるといいんじゃないかなと思う。ただ、学校が担えることってというのは絶対あると思うから。

一 性教育のこれから

小野 性教育を充実させるために、学校にできることは何だと思いますか。

大森 性教育についてとか、それぞれのトピックで専門的な人っていうのがいるわけじゃない。だからそういう人がもっと学校に入ってきて、その人が全部授業をするっていうわけじゃなくて、そういう人たちと教員がチームティーチングみたいな形でやればいいと思う。私だって、性教育が超専門じゃないから、現状とか知っていることはもちろん限られているし。性教育だけをやっているわけじゃないから、1年に2、3回やったら次の単元に行って。1年に数回しか教えないわけよ。だからそういうところの人たちと会話して授業をすとか、そういうことがもっと頻繁にできれば。例えば薬物だったら、薬物の研究者でもいいし、それぞれの専門性がある人ともう少し繋がることできれば、特に性教育なんかはいいんじゃないかな。色んな人の話を聞くとか、先生の属性にあんまりよらないで、助産師さんの話を聞くとか、そういう若者の相談を受けている人たちの話を聞くとか。そういう機会を授業の中でつくれたらすごくいいなって思う。妊娠出産とかね、したこともない人がさ、「痛いらしいよ？」って言っても「はあ…」みたいな感じじゃん。男性陣なんかまず生理とかわかんないじゃん。だけど私がすごく生々しく生理の話をすると、男性生徒はみんな「やめてください」みたいな感じになるの。先生の生身の人生を少し話しながら共感できたりするのもいいけど、特に性教育なんかは専門家とタッグを組めたらいいなと思う。一つの授業で全クラス来てもらうってなるとそんな簡単なことではないけど、やれたらいいなとは思っています。

小野 すごく素晴らしい案だと思うんですけど、それを多くの学校でやると考えると政府の協力が必要になると思います。そういう案があったときに政府に提言できる機会はあるんですか。

大森 私が政府に言う機会はないね。こういうのを決めるところに行かないと。文科省とか教科書を作ることとか。私が直接政府に言うっていうのはないし、十分学校のルールだけでもできと思う。どの学校でも講演会をやったりするじゃない。そういう行事とかを上手に使うとか。

塩塚 結局学校によって決まってしまうという感じですか。全体的に専門の方を呼ぶようにするというよりかは、そういう案をもった先生が、独自で学校として呼ぶっていう。

大森 逆に、そういうのを外部で入れなさいって言ったら、どの団体にするのとか。全国の全部の学校にその人たちを配置するとしたら、お金が動くわけじゃない。ボランティアでやってっていうわけには行かないと思うから。でももしお金が発生するんだったら、その予算はどこからくるのとか、全部に配置するためにどの団体にするのとか。性教育って言ったっていろいろあるわけじゃない。カリキュラムも多少違うし。その中でそれを国が全部決めるのは難しいと思う。ただ教育委員会とかそういうレベルになればできると思うけど。

小野 教育委員会に問題提起する機会がありますか。

大森 私立だからほとんどないね。公立だと結構関係あるんじゃないかな。でもあんまり教員が教育委員会に授業内容について抗議することはないと思う。教員が抗議しても、結局その上にいるのは校長だから。なかなか現場の教員が全体を変えるっていうのは難しいと思う。

小野 保健室の先生と連携は取りますか。

大森 取るね。それも担当の先生によると思うけど。連携するようにはしているけど、全員がそうかっていうとそれは正直難しい。

伊東 以前、学生で性教育を広めたいと活動されている方（宮坂さん）のお話を聞いたんですが、包括的な性教育についてそこで初めて詳しく知りました。生殖に関すること以外にも、例えば恋愛をしない人がいてもいいんだ、同性を好きになってもいいんだ、などにも比重を割いて授業されるような意識とかありますか。

大森 今だったら柔軟性を持ってできると思うけど、それが20代だったら、自分が分かってないから教えられないじゃない。教員自体も自分の高校時代しか授業受けてないんだから。性教育についての授業を大学でいっぱい受けるわけでもないし。すごい大事だけど、これをどのように膨らませるかはその人によるところがあるから、そこを私は教えたい。教員になった後もそういうのは勉強しないといけないし。知識的なことじゃなくて、自分自身が人を大事にするってどういうことか、みたいなことを教えるのってとても大変だと思う。そういうのを知る

本や映像があれば、勉強する機会にはなるのかなと思う。でも、性教育ってネガティブな要素が多いよね。こうしちゃいけないみたいなの。難しいよね。だからこそ、等身大の人が来てくれると理解が深まる気がします。

一同 ありがとうございました。

学生団体から見た性教育の課題と解決策

宮坂 舞花（みやさか まいか）

性教育学生団体Palette代表



1998年6月28日生まれ。2017に北海道教育大学に入学し、現在も在籍中（休学中）。ノルウェーへの留学中に感じた性教育格差の衝撃から、性教育学生団体Paletteを創設。SNSを使った情報発信やイベント開催、出張授業、公式LINEアカウント運営などを行う。科学的根拠の伴う正しい性知識を一人でも、一つでも多く伝えることで、その人の人生の自己決定の助けになれるかもしれないことや、自身が目指す「みんなが自分らしく幸せに生きられる社会」に必要不可欠である包括的性教育についてより多くの人に関心を持ってもらい、必要性を感じてもらうことをやりがいに感じている。趣味は犬の世話、読書など。

一 性教育学生団体Palette活動について

伊東 始めにパレットさんが、どのような活動を普段されているのかお伺いしたいのですが、よろしいですか。

宮坂 性教育学生団体パレットという名前で活動しています。メンバーは北海道旭川市が私の大学があるところなんですけど、そこだけではなく札幌、関東圏・関西圏、一番南は大分にメンバーがいて、日本全国に広がる27人のメンバーでオンラインを中心に活動しています。よかったらSNSも見てください。で、私の紹介もザクっと。去年の1月から4月にもととは教育大学に通っていて、教育にすごく興味がありました。北欧の教育ってよくすごく良いって言われるじゃないですか。社会制度・福祉がすごく充実していて、税金はすごく高いのに幸福度の高い国民生活とかそういうところに興味があって、北欧に留学したいなと思って。うちの大学

と提携を結んでいたノルウェーのベルゲン大学っていうところに留学させていただいたんですけど、そのノルウェーでの生活の中で、ノルウェーの社会風土みたいなものももちろん感じつつ、同時にその大学への留学生の8割がヨーロッパ各国出身だったんですよ。だから一緒に寮で生活したり、友達としておしゃべりしたりっていう人たちが必然的にヨーロッパ出身の人たちが多くって。そういう人たちと話している中で自分が今まで受けてきた性に関する教育だったり持ってる価値観とか知識の量とその彼らが持ってるそれとか受けていた教育ってものが、なんか全然違うんじゃないかっていうところにすごく衝撃を受けたんですよ。

なんなんだこの違いは、となって。そこから興味を持って性教育について調べ始めていくと、向こうでは包括的性教育っていうのが主流だと。日本で性教育っていうと生殖のことや生理のことなど、そういうことばかり思いついてしまうけれども、包括的性教育っていうのはそういうことだけではなく、性に関する多様な分野を扱うので、例えばコミュニケーションの取り方だったり、同意の取り方だったり、暴力ってどういうものを暴力っていうのか、家族ってどういうものか、あとは多文化共生のところまで広がって、本当に多様な分野で教育が、しかも義務教育というか国が包括的性教育をカリキュラムに組み込みましょうねというのを決めている。その国に生まれ落ちたら強制的にというか、自動的にその包括的性教育を受けて育てられるっていう環境があったんですよ。

ただ、私たちの国では必要な情報さえまともに手に入らない状況があるなって思っていて。日本はすごく性産業が発達しているから、インターネットで例えばGoogleで「セックス」という言葉を入れて調べるともう大量のポルノとアダルトが出てくるわけですよ。そういうふうに簡単にポルノ・アダルトにアクセスできてしまったり、謝った情報とか俗説、例えば膣内射精をした後にコーラで膣内を洗えば大丈夫だみたいなものとか、逆立ちすれば妊娠しないとかね。なんかそういうものとかいっぱいあるじゃないですか。

伊東 はい。

宮坂 そうやって性情報が氾濫しているけれど、じゃあその中で正しい情報を拾うためには、ある程度の事前知識だったりどういうふうに情報を精査していけばいいのかっていうスキルが必要だと思うんです。じゃあ学校教育でそういうことが行われているかっていうと、性に関する正しい知識を手に入れる機会が圧倒的に不足しているからこそ、誤ったものを誤ったものとして認識せずに、取り入れてしまう。それこそアダルト動画で性を学んでることが、実際に起きてしまっている。それはすごく危険なことだっていうふうに思ったりもしてます。

あと、性に関することっていうのは自分っていうアイデンティティに深く関わることなので、自分について知ること、自分自身に目を向けて、自分が何が好きで何が嫌いで、何をしてる時が心地よくて、どんな自分が好きなのか、とか自分を尊重することにも繋がると思います。自

分を尊重するという事は、回り回って相手を尊重することにも繋がるので、こういった大きく二つの意味で性教育って大事だなと考えて、団体を設立しました。

伊東 ありがとうございます。自分自身も正しい知識を得てきた記憶がありません。

宮坂 そうですね。

伊東 なので、科学的かつ医学的に正しい知識を得られる場があるっていうのは、すごくいいなと思います。実際にcocohana使ってみたんですけど、そうするとやっぱり先ほどおっしゃっていた包括的性教育っていうのがそのまま体现されているなと思って。ジェンダーとか幅広いことにもトライされていて、そこがすごく印象的だったんですけど、実際に若年層の方にどのようにcocohanaを広げて、かつどのように利用してもらうことを想定されていますか？

宮坂 まだちょっとリリースから時間が経っていないので、本当にこれから周知活動とか頑張っていかなきゃなというところなんですけど、クラウドファンディングをやらせてもらったの同時のタイミングでミーツcocohanaプロジェクトっていうのを別で立てていて。それが何かって言うと、あのラインアカウントを知ってもらうために、チラシを作成したり、学校内でわかりやすいようなカードとか消しゴムとかそういった周知グッズみたいなものを用意するので、子供に関わる仕事をしている人で「配布することができるよ」とかもしくは「児童館の職員だから児童館に置いておけるよ」という人を募って、その方々に必要枚数・必要数送って子供達に広めてもらうみたいなことをして。今は1回目で9名の方に送付させていただきました。中には保健室の先生だったり学校の校長先生だったりがあります。「全学年に配ります」とか「学校に掲示します」とか「保健室に置いておきます」と言ってくれる方もいらっしゃいました。あとは、カフェを運営していて、「20代から40代の女性がメインターゲットなんですけど、お母さん層とかから先に広まって、で子供さんに伝わればいいかなって思うので、ぜひおかせてください」なんていう声も頂いたりして。そういった必要数を送付するので、配布したり設置したりのご協力をお願いしますっていう活動をこれからも続けていくことで、自分たちの知り合い以外のところにもどうにか伝えようとしているところですね。あとは性教育公演などですでにいろんな学校さんを回られている方もいらっしゃいますので、そういった方には事情をお話して、サンプルを送らせてもらって、「ぜひ今度の講演会の時に配布していただけないか」というお願いをして、「大丈夫です」というふうに言ってくださった場合には、送って配ってもらうみたいなことを想定しております。それがメインターゲットの中高生に届いた暁には、LINEってすごく身近なツールなので、何かふと疑問に思ったときに、例えばラインでパートナーの人と会話をしていると、今度もしかしたら性行為をするかもしれな

いっていうふうな流れになったと。でも「あれ何を準備すればいいんだっけ」とか「性行為を私たち今して大丈夫だろうか」とかって思った時に、同じLINEの中にcocohanaのアカウントがあるので、すぐに情報を確認できるような仕様になっているので、そういうふうな日常生活のふとした瞬間に思い出して、「そういえばcocohanaいけば情報があるかも」みたいな感じで活用してほしいなと思っています。

伊東 確かに、気軽さがありますよね。LINEの方が。

宮坂 そうですね。たくさん良いウェブサイトとかもあるんですよ。実際にそこをcocohanaとかに繋がったりはしてるんですけど、中々若い層ってホームページとかウェブサイトって馴染みがないというか、目的がないとそこに辿り着かないですよ。それがすごく勿体無い。せっかくすでに素晴らしいサイト、それこそセシルとかですけど、（いいサイトが）あるのに。そこへのアクセスのハードルを下げることで活用できないかなと思っています。手軽さっていうのは結構大事ですね。

伊東 イメージとしては、有用なサイトだったりメディアに繋げてあげる手段を提供しているという感じなんですか。

宮坂 そうですね。まさに。さっきもちょっと言いましたけど、私たちは決して専門家の集団でもなんでもなくて、言わばただの学生じゃないですか。多少勉強はしたり興味はあったりとかで、みんなそれぞれに情報を入れる努力はしているけど、世間から見たらただの学生ということに変わりはないなと思っていて。私たちがそういう情報を発信するメディアを作ってもよかったですけど、やっぱりInstagramとかと違って、全分野を網羅するとなるとかなりの労力を要しますし、一つ一つに専門家の監修が必要になってくると思うんですよ。そうになると、作成という部分は私たちが担わなくて良いんじゃないかなと。得意な、というかそれがまさにお仕事である専門家の方々にお願いして良いんじゃないかなと。すでにたくさんあるわけだし、そういう良いメディアは。じゃあ私たちにできることはなんだろうと考えた時には、学生の目線でほしいリアルな情報。例えば、自分って包茎なのかななどという、よりメインターゲットの世代に近い層だからこそわかるようなリアルな声を拾って行って、情報を繋げる手助けをするということが自分たちに一番フィットすることかなと思いました。その役割を買って出たという感じですね、cocohanaに関しては。

伊東 ありがとうございます。先ほどクラウドファンディングをされたという話だったんですけど、その際に色んな全国の保健室の先生だったりとかから協力を得られたということで、ど

うしてもイメージとして年代が上の層の方は性教育がタブー視された中で育ってきたというのがあるので、中々賛同を得ることが難しい状況もあったんじゃないかなと思うのですが、どのように性教育が重要であることを伝える手段を意識されてましたか。

宮坂 そうですね。でもクラウドファンディングの時は、20代30代の層が一番支援してくださっていて、40代の層もいるけど20、30%くらいかなという感じだったので。あのクラウドファンディングで元々無関心な層に届けられたかと言われるとあまり勢いよく頷けないところはありますね。ただ、キャンプファイヤー（クラウドファンディングのサイト）って支援してくださった人がコメントを残せる仕様になってるんですね。そこで印象的だったというか嬉しいなと思うメッセージがあって。私たちのクラウドファンディングのページをパッと見かけた時には支援するつもりなんてなかったんだけど、ページを上から下まで最後まで読んでみたら、すごく性教育って大事なことだなって思ったし、頑張っしてほしいって思ったから、やっぱり支援しました、というコメントがあって。あのページすごく頑張って作ったんですよ。というのも、クラウドファンディングを支援してくださいっていうのももちろんあるんだけど、支援しなくてもあのページを見るだけで日本の現状だったり、性教育もそうだし、その他の性を取り巻く色んな課題、それこそ性産業は活発だけど性教育ができてないからアダルトから学ぶことになるみたいなのところをもっと色んな人にクラウドファンディングを通して知ってもらいたいと思っていたので。そういう状況説明をすごく頑張ったんですね。それがそういうふうに届いたのかなって、メッセージをいただいた時に思えたので、それはすごく印象的でしたし嬉しかったですね。

伊東 私も読んだんですけど、自分の知識が補われる感じがしてとても興味深かったです。あれを読むとクラウドファンディングしようかなという気持ちになるのもすごくわかるなと思いました。

宮坂 本当ですか。クラウドファンディングが終わった後に読み返すと反省がいっぱい見えてきてしまったので、そういうふうに言っていただけると慰められます。

伊東 また新しく動画を出されるということなんですけど、それはまた動画にしてもっとわかりやすいような知識の提供という形式なんですか。

宮坂 Youtubeをやろうとなったきっかけは、ターゲットの層を変えたいというのがありましたね。やっぱり20代が多いじゃないですか、インスタグラムとかだと。だから10代、ユースの子たちが見てるのってYoutubeとかTikTokとかになるかなと感じたので、インスタグラムとか

Twitterでは掠ってこない層に届けたいから、新たなプラットフォームにというのがまず一つありました。よりリアルに届けられるかなって思ったんですよね。性に関する情報とか知識をどれだけ自分ごとに捉えてもらえるかっていうのが結構課題だなと私たちも感じてるんですけど。動画の方針もこれからどんどんやりながら変えていくんですが、ただ一つ、Youtubeやろうっていう最初の時に言ってたのは、実際に自分たちと年代が近い声だったり姿だったりが入ることによって親近感というか、自分ごとになるきっかけになるかなって。どうしても他のSNSだと、デジタルの文字でしか伝わらないじゃないですか。だからその先に生身の人間がいるというか、自分と同じ世代の人間が発信しているみたいなところを何か伝えられたら動画で良いかなっていうふうに思って、やってみようかっていうふうに始めたっていうのがありますね。

一 性知識の重要さ

伊東 ありがとうございます。確かに20代はもちろんそうなんですけど、10代のうちからそういう知識に触れるっていうのはすごく大事ですよ。

宮坂 そうですよ。本当に性の知識って人生を左右してくるものだと思うんですよ。特に女性の体、妊娠できる体を持っている人は切実ですけど、だけじゃなくてそれこそ最近LGBT系の話題が色んなところで盛んになってきてますが、そういったセクシュアリティとかジェンダーとかっていうのもアイデンティティにすごく関わってくるので。例えば自分の話ですけど、私すごく幼少期から自分のジェンダーにモヤモヤというか、シスジェンダー女性の認識ではあるんですけど、女らしさを求められるのがすごく嫌だったんですよ。モヤモヤってして。だけど、それは自分がおかしいんだと思っていました。自分がガサツな女だから悪いんだと思っていたんです。だけどジェンダー学とかフェミニズムに出会った時に、あっ、そうじゃないんだって。これって社会の問題なんだなって気づけた時ってすごく自分を許せるというか。自分を許せないで、ああ自分ってダメだな、社会の女らしさに適用していかなきゃっていうふうに生きる自分と、自分は今のままの自分で良いんだと。変わるべきは社会だ。っていうふうに思って生きていくのとはやっぱり人生というか色が違ってくると思うんですよ。そういった意味でも性に関する知識って本当に自分の人生をどう描いてどう実行していくかっていうところに密接に関わってくると思うので。若いうちから正しい知識なり価値観なり身につけていってほしいなとは思いますね。

伊東 自分でこのままの自分で良いんだというふうに宮坂さんのように気づける人もいれば気づけない人もいると思うので、そういった方に対してちゃんと知れる機会を提供するというのはすごく大事ですよ。

宮坂 本当にそうだと思います。

一 性教育推進の課題

伊東 ありがとうございます。あとこれは今、お話を伺った中で見えてきたんですけど、ターゲット層が今の段階では狭かったりここから広げていきたいという思いがあったと思います。今そういった包括的な性教育の啓蒙活動を行われている中ですごく大変だったり、あるいは課題に感じているということがなにかありましたら伺いしたいです。

宮坂 そうですね。二つあって、一つ目はどう自分ごと化して、捉えてもらえるかということ。やっぱり教科書上の知識というか、例えば性感染症の知識とか避妊の知識とかっていうのを知ってはいるんだけど、実行できるかって言ったら別だになっていうふうに思っていて。そういうふうなところで自分ごと化してほしいなと思うし。例えば性被害の報道なんかでセカンドレイプも未だに横行してますけど、いつ自分の身に起こるかってわからないじゃないですか。決して遠い話じゃないし、異質な人たちの話じゃないし、本当に一人ひとりに関わってくる事柄、知識なんだよってというのはどう伝えていけばいいのかなっていうのは課題というか大事にしたいことの一つではありますね。もう一つが、やっぱり無関心層にどう届けるか、っていうところですね。イベントをやるにしても、インスタグラムのフォロワー層にしても、やっぱりすでに知識があるとか、関心がある人たちが集まってきてくれる傾向があって。それはそれで嬉しいんですけど、一番届けたいのは無関心層なので、そこにどうアプローチできるかっていうのは課題だなと感じてますね。

伊東 確かに例えばインスタグラムとかだと自分でアクセスしないといけないっていう壁はありますよね。

宮坂 そうなんですよ。だから普段からそういうハッシュタグを検索していてとか、そういう事柄に関心があって別の投稿を見てておすすめに上がってくるとかだと良いんですけど。全くそっちじゃないものを普段目にしていると上がってこないですよ。それは難しさを感じますね。

伊東 ただ先ほどおっしゃっていたYoutubeとかだと、インスタグラムに比べると関連動画などで、関心がない方にも上がってくる可能性も高まると思います。そういったところで広がっていくといいなと私も個人的にすごく思います。

宮坂 そうですね。ありがとうございます。

一 性知識の格差

伊東 コロナに関してなのですが、いまの課題に加えて、例えば望まぬ、予期せぬ妊娠に対して「予期せぬってなんだよ」というような批判もありましたよね。そういった理解の二極化というか、差がすごく激しいと思うのですが、具体的にコロナになってから活動内容で変化などはありましたか

宮坂 うちの団体が活動を始めたのがコロナの真っ最中なので、うちの団体としての変化はあまりないですね。たしかに世論は二極化が進んでいるのかもしれないですね。まさに「予期せぬってなんだ」という言葉は、以前団体の活動取材していただいたときに、FNNオンラインの記事に載ったことがあって、その記事をFNNのツイッターでも流していただいたんです。拡散もかなりされたんですが、コメント欄を見ていると、私たちの団体と同じドキュメントで北海道在住で予期せぬ妊娠をしてしまい生む決断をした19歳の女性を取り上げられていて。どちらかというと私たちの活動に対する批判ではなくその女性に対する批判だと思うんですけど、本当にそういう声が多くて。「予期せぬってなんだよ」「コンドームつけるよ」みたいな。本当に見ていられなかったですね。知識があればこんな言葉は出てこないはずなのにな、コンドームの避妊率知ってますかって言いたくなりました。

伊東 それはもとをたどっていくと幼少期にちゃんとした知識を教えられないからというのが挙げられますよね。

宮坂 そうですね。あとはいろんなタイミングで歪んだ価値観を形成してしまう、アダルト見て育つと性の商品化にすごく慣れてしまいますし、暴力的な性表現もそれが普通だと思ってしまったり。あとはホモソーシャルのすごく強い社会で生きていくとそういう風な価値観も形成されやすいですね。

伊東 あとはコロナ禍で生理の貧困なんかもあまり理解がなかったりというのもよく見られました。私は生理の授業だけ男女分かれて学んだことがかなり印象に残っています。

宮坂 今は月経の授業を男女でやる学校も増えてきてはいるみたいなんですけど。生理の貧困に対する意見もすごいですよね。

一 活動の原動力

伊東 ツイッターなどでそのような批判を見ていると飽き飽きしてしまいます。現状に向き合っていくのは疲れたりすると思いますが、原動力になっていることはありますか

宮坂 実体験が絡んでくる部分があるっていうのも一つあると思います。例えば私は高校生の頃からすごく生理とPMSがひどくて。いま振り返れば受験勉強にも多大な影響を及ぼしていたなと思うんですが、当時はそんなことを考えなかったし、みんなこんなもんだらうと思ってたし、ましてやPMSの症状が出ている時なんてより自分を責めやすいから、自分のせいなんじゃないか、自分のこのやる気の出なさや悲しくなるのは勉強したくないことからくる甘えではないかと自分を責めていたんです。大学生になってようやく婦人科に通えて、低用量ピルの服用を開始できたんですね。そこで軽く人生が変わるくらいいろいろ楽になったんですよ。生理自体も軽くなり、PMSもだいぶ軽減されて、そのときにすごくなんで誰も教えてくれなかったんだろうと強い憤りを覚えたんですね。なんでこんないい対処法があったのに誰も教えてくれないし、ピルを飲む＝ビッチのような価値観さえあって、なんなんだ！ってなったんですね。それに加えて先ほど話したジェンダーの違和感もありましたし。あとは教育がすごく好きで。教育大学に通っている途中までは絶対教員になるぞというモチベーションで勉強していた。なので社会を変えていくには教育は必須だと思うんです。教育が人を作っていくし、その人が社会を作っていくので、社会を変えたいと思ったら教育をするべきだと思うし、教育にお金がかかけられない国に未来はないと思うんですよ。だって未来を育てる機関なわけじゃないですか、教育って。社会を良くするためには教育は必須、というその中に私は性教育も必要不可欠だと思います。性に関する知識というのは人生をどのようにプランニングして描いていくかということにすごく関わってくるというのがありますし、あとは日本の若者の自己肯定感の低さって諸外国に比べてすごく顕著ですよ。そういったところもジェンダーだったりセクシュアリティだったり、自分を否定して生きていくというか、どうせ声を上げててもこの社会は変わらないだろうというところからきていると思うんですけど。性教育は人権教育なので、そのままのあなたでいいです。ただなにかしたいのであればこういうスキルや知識が必

要だ、みたいな教育なので、日本の教育でよくある条件付きの褒められ方ではないというか。テストで100点取ったらあなたは認められるべき人、部活で優秀な成績を残したからあなたはすごい人、のような評価ではなく、制教育のベースにある人権教育って、そもそもあなたはあなたでいて100点、花丸、生きていてえらい、というようなところから始まるので。そういったところでも自己肯定感に影響はあるなと感じていて。実際に性教育を実践していくと自己肯定感があがるというデータも出ています。やはりこの国に一番欠けているものとして性教育があるなと日々実感しているというか。なので、原動力になっていますね。本気で性教育をやったほうがいいと思っているんですよ。性教育をやることでこの国のいろんな諸課題、全部とは言わないけど結構な確率で解決できることもあると思います。本気でそう思ってるから（がんばれる）かもしれないです。

一 性教育の義務化に向けてわたしたちにできること

伊東 包括的な性教育を義務教育の肯定に入れるという学習の要項の見直しが日本ではあまり進んでいない中で、私たち個人が意識できることはなにかありますか

宮坂 いまぱっと思いついたのは二つあって、一つ目は声を上げていくことです。どんな影響力がある人、ジェンダーの諸課題に対して先頭で声を上げていращやる方がいても、その人たちにすべてを任せていてはだめだと思うんですよ。本当に個人で、半径5メートルの相手に影響を与えられればいから、それくらいのレベルで声を上げ続けていく、日常でなにか違うなと思ったら話してみるのもひとつのソーシャルアクションだと思いますし、本を読んでみる、その感想を共有してみるっていうのもアクションのひとつです。そういう一つ一つのことでいいから実行していくというのは必要不可欠だと思います。ひとりでできることなんて本当に限られているので。ただやらなければ何も変わらないし一人一人ができることの積み重ねで影響の波っていうのはくると思います。大海に石を投げ続けるような作業でたまに呆然とするときもあるんですが、それでも小石を投げ続ける、もしできたら一緒に投げしてくれる仲間を見つけて投げる、というのがまず一つできることだと思います。もう一つが選挙に行くこと。こういう活動をやっている、政治、制度が変わらないとどうしようもないことって本当に多いと感じていて。義務教育に性教育を入れる入れないもまさにそうなんですけど、いくら民間が頑張っても制度の限界があると限界値ってくるので。その思いを託せる政治家に一人でも多く投票すること、もしくは思いを託せる政治家まで探せなくても、自分の思いに180度反対方向に行くような政治家を選ばない。それだけでもいいので、もっと政治に興味を持つことも大事だと思います。いまの方法で選挙を行っても若者が勝てないから意味がないという理

論もわかるんですが、じゃあその選挙制度自体に声を上げればいいし、地方と都市部での一票の格差などにも声を上げればいいと思います。政治に目を向ける、選挙に行く、ここもひとつできることだと思います。

性教育学生団体 Palette

性教育学生団体Paletteは、北海道教育大学4年生の宮坂さんが代表を務め、旭川・札幌・関東・関西・大分など全国から25人のメンバーで構成されている学生団体である。団体のミッションとして「人生の自己決定のために必要な、正しい（医学的・科学的根拠に基づいた）性に関する知識を届ける」と「自分と相手を大切にすること、その手段を知ってもらうことを掲げている。

団体創立の経緯は、宮坂さん自身の体験に根ざしているという。宮坂さんは関心のある教育を学ぶために留学先として選んだノルウェーにおいて、日本で得た価値観を揺るがすカルチャーショックを経験した。ヨーロッパ出身の友人と話している中で、性に関する価値観や知識の量に大きく差があることを実感したという。生殖に関する知識のみならず、コミュニケーションやアイデンティティなど性に関する多様な分野においても日本は後進的であると感じた。日本は性産業の発展によって誤った情報や俗説が氾濫しており、正しい情報を手に入れる機会が圧倒的に不足している。本来そのような機会は教育によって与えられるべきであるため、「性教育」の重要性を認識し、団体創立に至ったという。正しい性知識の獲得や自己・他者の理解によって、自己のライフプランの作成・実現や他者と自己の尊重、正しい知識の後継ができる個人の育成を目的としている。こうした個人の変化によって社会全体にも人権意識や多様性が醸成されるだろう。

主な活動内容は大きくコミュニティ内と外に分けられる。コミュニティ内では、メンバー間での意見交換や懇親会、勉強会が開催されており、学びの場所を設けるエンパワーメント型の活動と称している。次に、コミュニティから社会への発信・啓発活動では、大きく6つのプロジェクトが進行している。

① Palettegram

Instagramを利用し、正しい性に関する情報発信を行う。

② Health Hub

中高生を中心に、性に関する知識や情報を必要としている若者と専門家を繋ぐオンライン情報ハブとして、LINEアカウント「COCO HANA」の整備・運営を行う。クラウドファンディングによって運営を開始したCOCO HANAはLINEならではの気軽さが利点である。有用なサイトやメディアが多数ある中で、そこに辿り着くルートが知られていないという現状の解決を図っている。また、性知識は専門家の監修が重要であるという信念に基づき、学生がメディアを作成するのではなく、あくまで若年層のリアルな目線で必要な情報を判断し、繋げる手助けをするというキュレーションメディアの形をとっている。

③ Palette Room

「自分の身体と心に向き合う時間」をテーマに月に一度開催されるイベントである。旭川市でオンラインで開催されている。



11月20日に開催されたPalette roomの様子。

「ボードゲームから性を考えよう！」をテーマに、性教育ボードゲーム「ブレイクスズろく」をプレイしている。

④ 性教育イベント

メンバーによって企画・運営される不定期のオンラインイベント。

⑤ YouTube

YouTube上で性教育に関する情報を発信。デジタルの文字ではなく、若年層が自分ごととして捉えやすい映像を媒体にしている。InstagramやTwitterでは拾えない層にアプローチをする新たなプラットフォームとして機能する。

⑥ Peer Talk

学校への出張ワークショップで、性に関する話を話し合い、知識を蓄えることを目的としている。年齢の近い大学生と話すことで、中高生が親しみやすい環境を提供している。

コラム：看過されている包括的性教育の重要性（伊東）

宮坂さんは、日本に不足しているのは包括的性教育だと指摘する。包括的性教育とは、ジェンダー平等や性の多様性など、性に関する多様な分野を扱う教育のことを指す。1999年に性の健康世界学会で採択された「性の権利宣言」では、包括的性教育を受ける権利が全ての人にあるとされている。日本の性教育は、生殖や生理など人体に関わるものが主で、学習単位が限定的である。実際に私自身も高校で学んだ保健体育では、アイデンティティに関わるような内容を扱われた記憶はなく、生殖に関わる内容にとどまっていた。ジェンダーやコミュニティ形成の考え方は個人的に興味を持って学んだり、大学入学後に知ったりするケースが多いと思う。よって、日本の性教育を受けた場合は自己理解の根幹を自力で形成しなければならず、個人間で知識量の差が大幅に生じてしまっていると感じる。

包括的性教育では、アイデンティティ形成に重要なジェンダーや人生観、コミュニケーションや同意の取り方、家族などコミュニティ形成、暴力など幅広く多様な分野が扱われる。つまり、性知識とは本来自己理解に欠かせないものであり、自分の好き嫌いや感情を知り、どんな自分でありたいかを決定するために必要な情報である。正しい性知識をもって自己を尊重できるようになれば、異質な他者を受け入れることができるようになり、他者の尊重にも繋がる。宮坂さんの留学先であったノルウェーのような先進国では、包括的性教育は義務教育に含有されており、成長過程で必ず触れることになっている。どんな人生をどんな人間として送りたいかを意思決定する上で肝要な知識であるため、義務教育で包括的性教育を行うことが重要である。近年では、日本においても包括的性教育の重要性は認知され始め、導入に向けた動きが見られる。

コラム：早稲田大学生に何ができるか（小野）

日本の性教育の遅れを改善するために何ができるのか。このコラムでは、一般社団法人Voice Up Japanの早稲田支部（以下、Voice Up Japan Waseda）の活動を取り上げ、私たち大学生にできることを紹介する。

Voice Up Japanは、誰もが守られ尊敬される社会を目指し、「声を上げにくい社会で声を上げる人を支える」活動を行っている。全国の大学に学生支部を持っており、Voice Up Japan Wasedaはキャンパスに内在するジェンダー不平等に向き合う機会を創出することをミッションとして掲げている。

Voice Up Japan Wasedaは、様々なプロジェクトを実施しており、その一つとして「性的同意プロジェクト」がある。このプロジェクトは、早稲田大学における性犯罪・暴力の根絶を目標とし、「シャベル：早稲田で性暴力の根を切る」という団体と共同で取り組んでいる。これまで学内における性被害のアンケート調査を実施し、性的同意に係る情報の提供機会を求める要望書を大学に提出した。要望書提出に際し、早稲田大学の関係者から賛同者を募集し、最終的には45人の教職員および501人の早稲田大学生（卒業生含む）から賛同署名を集めた。

性的同意プロジェクトのリーダーである早稲田大学法学部の北垣優衣さんに話を伺ったところ、プロジェクトを行ったことで当事者が自分のに起きたことを「被害」と認識できるようになったそう。「前まで自分が悪かったと自責に囚われていた方が、自分は悪くなかったと考えるようになった」という。

早稲田大学生は、Voice Up Japan Wasedaの活動に参加することで現状を少しずつ変えることができる。性的同意プロジェクトだけでなく生理用品大学設置プロジェクトなど、様々な活動が現在進められている。Voice Up Japanに所属していなくても困っている人に目を向け、具体的なアクションを起こすことで社会は確実に変わる。

取材を終えて（塩塚）

今回の取材では、企画から実際のインタビュー、その後の記事制作まで基本的にスムーズに行うことができた。私たち3人はもともとジェンダーや性教育の問題に関心があったため、問題提起や取材での質問もより具体的に、普段自分が考えていることを取り入れて向き合うことができたと感じる。

また、この取材を通して私は「多方面の意見を聞くことの重要性」を感じた。取材の流れとしては、学生団体Paletteにインタビューを行った後に大森先生にお話を伺ったのだが、中にはそれぞれの立場で実際に経験しないとわからない話もあった。片方の話を聞いて「もっとこうすればいいのに」と思うようなことも、もう一方の話を聞くと現実的ではなかったり、実現可能性が低かったりする。問題を多方面から捉え、考え直すことがこのような大きなテーマを扱う取材の上では大事だと強く感じた。今回は学生と先生、性教育を受ける立場と行う立場の両方向から話を聞いたが、性教育の根本のルールを決めている政府や行政に話を聞くことができれば、さらに深い記事になったはずだ。

ただ、取材を行う上で注意すべきこととして、テーマをあらかじめ明確に提示し、話を聞くときにどのような答えを相手から引き出したいか考えておくことが必要だと感じた。取材中はどうしても話が脱線しまい、複数人に取材を行うと伝えたいこともバラバラだ。記事にまとめる際に質問に一貫性があり、何を伝えたいかが明確になっておけば、読者も読みやすい記事になるだろう。このようなことは今後の取材経験に生かしていこうと思う。

先述したように、私たちは性教育やジェンダー問題について以前から関心があった。だからこそ、今回宮坂さんが提示してくれた今後の解決策や、大森先生の性教育に対する考え方を、関心がない層にアプローチする方法を考える必要がある。どんなに小さいことでもアクションを起こし、取材で学んだことを今後の生活でも周囲の人に少しずつ伝えていきたい。